

氏名(本籍)	さか た みち お 坂 田 道 生 (青 森 県)			
学位の種類	博 士 (芸 術 学)			
学位記番号	博 甲 第 5805 号			
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審査研究科	人間総合科学研究科			
学位論文題目	古代ローマの犠牲式図像研究 -ローマ共和政からハドリアヌス治世まで-			
主査	筑波大学教授	博士(芸術学)	守 屋 正 彦	
副査	筑波大学准教授	Dr. Phil.	長 田 年 弘	
副査	筑波大学准教授	博士(芸術学)	直 江 俊 雄	
副査	武蔵野美術大学教授		篠 塚 千 恵 子	

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

ローマ宗教において重要な儀礼である犠牲式を表わす図像は、前2世紀以降のローマ史研究のために不可欠であるにもかかわらず、これまで不完全にしか研究されてこなかった。儀礼と宗教に関わる、犠牲式図像の作例の基礎的な整理と考察は、歴史学と美術史学の双方に対して大きな寄与をなしうと思われる。

1955年にI.S. Rybergが著した*Rites of the State Religion in Roman Art*は、ローマ時代の宗教図像を扱う初めての研究書である。宗教図像を用いて、共和政後期から帝政後期までのローマ時代の宗教の発展を検証したものであるが、儀式図像の変遷と社会的背景との関わりについては十分な考察を欠いている。1990年にR. Gordonが著した*The Veil of Power*は、ローマ時代の犠牲式図像において、プリンケプス(皇帝)がどのような役割を担っているのか検討を行い、二つの特徴に着目した。第一に、犠牲式図像においては、神への捧げ物よりも執行者としての皇帝の役割の方が強調して表されているとする。第二に、生贄を媒介とする犠牲式の意義、つまり神と人との意思疎通が表現の上で重視されていないと見なす。これら二つの特徴から、犠牲式図像は犠牲式の本来の意味ではなく、執行者の役割の表現に焦点をあてて制作されたとR. Gordonは考えた。しかし、R. Gordonの見解は、その後の資料公開や研究の展開に鑑みると、単純化されすぎているといえよう。

(対象と方法)

本研究では、犠牲式図像における執行者としての皇帝の役割の変化を考察し、さらに犠牲式表現がどのように変遷したかを検討する。さらに、考察の基盤として、当該期間における作例を網羅するカタログを作成し、犠牲式図像の展開を記述する。

上述のI.S. Rybergの著書では、ローマ時代の宗教に関わる図像(コインを除く)131作例を考察の対象としている。82点の犠牲式図像は、前3世紀から4世紀までに制作され、属州を含めたローマ帝国内から見つかったものを対象としている。本研究では、共和政期からトラヤヌス治世に制作され、イタリア半島から発見された60作例に関して考察を加える。

(結果)

こうした問題提起の後、主たる考察として、第二章から第四章において皇帝を執行者とする犠牲式図像について検討を加えた。

第二章では、後1世紀の犠牲式図像の展開を記述する。アウグストゥス治世以前は、執行者は犠牲式図像において神々と共に表され、神々と儀式を結びつける役割を果たしていた。しかしアウグストゥス治世には、犠牲獣の屠殺場面が前景に配置され、儀式を見守る神々と儀式そのものを象徴的に結びつける神殿のファサードが背景に表されるようになる。アウグストゥス治世に創出されたこの図像表現は、公共物に表された例において、少なくともドミティアヌス帝が新たな図像表現を取り入れるまで用いられ続ける。ドミティアヌス治世においては、執行者は神々と共に表されるようになり、さらに、トラヤヌス治世には、図像表現がさらに多様化する。第三章では、113年奉獻のトラヤヌスの円柱について、犠牲式図像に焦点を当てることによって、先行研究には見られない新しいアプローチを行った。ここには、戦地における三つのタイプの犠牲式表現が認められた。すなわち、戦地への皇帝の到着を祝う犠牲式、軍営地の周辺を清めるための *suovetaurilia* (豚、牛、羊を生贄とする犠牲式)、そして戦地での建築の完成を祝う犠牲式である。第四章では、ハドリアヌス治世 (117 - 138年) に制作された円形浮き彫り群に表された犠牲式を扱った。それ以前の皇帝を執行者とする犠牲式表現には見られない、神像に対する犠牲式という特別な表現がなされていることを明らかにした。

第五章では、皇帝以外による犠牲式の場面を検討し、皇帝を執行者とする犠牲式図像の影響について考察した。

(考察)

犠牲式図像の展開をまとめると、アウグストゥス以前の犠牲式図像において、執行者は神々と並んで表される例がほとんどであるが、ドミティアヌス治世には、皇帝は神々と並び表現されるようになる。このように皇帝の役割に焦点を当てた表現は、皇帝を神々に比肩するとしたドミティアヌス帝の思想に関係していると思われる。トラヤヌス円柱においては、執行者としての皇帝は明白に強調されるようになる。犠牲式図像が、トラヤヌスの政治的、あるいは軍事的功績と関連して制作されたためと考えられる。一方、ハドリアヌスの円形浮彫群に表された4つの犠牲式場面は、神像に対する犠牲式という公的な犠牲式には見られない種類の場面が表される。論文ではこの犠牲式が私的領域における犠牲式を表現していることを明らかにしえた。

審査の結果の要旨

総評として、研究に明らかな遅滞の見られたローマ犠牲式図像という主題に取組み、作例を整理し、その基礎的展開を明らかにしえた点を高く評価したい。当該期間の作例の網羅的カタログを作成したことは、研究分野への大きな貢献といえる。ただし、論文中で、ローマ宗教における私的領域と公的領域についての言及がなされているので、両者の相違が犠牲式図像の展開にどのような意味を有していたのか、より深い構造的な考察がなされれば論文の意義を高めえたと思われる。しかしこうした点を除けば、トラヤヌス円柱やハドリアヌス犠牲式浮彫等の、ローマ美術を代表する作例に関して、従来とは全く異なる視点を与えることで研究分野を拡張しえた。その学術的な意味は大きいと判断される。

よって、著者は博士(芸術学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。